

聖書：使徒2：1～13

説教題：みなが聖霊に満たされ

日時：2013年5月19日

イエス様は天に昇る前に、弟子たちに「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。」と言われました。そして「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」と約束されました。それを聞いて使徒たちを始め、婦人たちや120名ほどの兄弟たちが集まって、心を合わせ、祈りに専念していました。その約束がついに今日の箇所です。その日は五旬節の日であったと1節にあります。五旬節とは50日目という意味で、過越の祭りの次の日曜日から数えて50日目のことです。この日は「七週の祭り」とか「初穂の日」と呼ばれるユダヤの三大祭りの一つであり、エルサレムは各地からの巡礼者で大賑わいとなっていました。その当日に天から聖霊が注がれるペンテコステの出来事が起きたのです。

この聖霊降臨は三つの不思議なしるしを伴って起こりました。その一つ目は「突然、天から、激しい風が吹いてくるような響きが起こった」ということです。何の前触れもなく、いきなり上空から激しい風が吹き付けるような音がしたのです。まるで台風の時のような、風速20メートルとか30メートルとか、あるいはそれ以上の暴風が吹いて来たかのような音がした。しかし注意深く見ると、風が吹いたとは書かれていません。ただそのような音が生じた。ここにはどういう意味があったのでしょうか。ご存知のように聖書言語における「風」と「御霊」は同じ言葉です。ですからこの音は、聖霊がここに臨んだことを思い起こさせる出来事だったのです。聖霊は創世記1章2節に「神の霊が水の上を動いていた」と記されていますように、天地創造のみわざにも関わっていましたが、エゼキエル書37章では死んだ骨にいのちを与え、生き返らせる再創造のみわざをなされる方としても示されています。まさにその再創造のみわざをされる聖霊がここに来られたことを示すものだったのでしょうか。

二つ目の不思議なしるしは3節の「炎のような分かれた舌」。先の音は聴覚に訴えるものであるのに対し、こちらは視覚に訴えるしるしです。現れたのは炎ではなく、舌です。しかも分かれた舌。果たしてそれはどんな光景であったのか、ほとんど想像できないようなものだったでしょう。なぜ舌の形が現れたのかについては、三つ目のしるしを見る時に分かって来ます。この舌は「炎」のようであったと言われています。この「炎」も、特別な神の臨在を現わすものです。神はモーセに燃える柴の中から語られました。また神はイスラエルを夜に火の柱となって導かれました。また神はモーセに十戒を与える時、シナイ山で火の中であって降りて来られました。この炎は神のきよさ、命、力を象徴していたでしょう。

そして三つ目のしるしは、「みなが聖霊に満たされて、他国の言葉で話し出した」ことです。そこには120名ほどの兄弟たちが集まっていましたが、その彼らが実に色々な国の言葉で何かをしゃべり始めたのです。この人たちはもともとそれらの言葉を話せたわけではありません。彼らにその能力はなかったのに、彼らの意識を越えて、様々な地方の言葉を一齐に話し出したのです。

ルカはこの三つのしるしの内、特に三番目のことに焦点を当てて、5節以降のことを書いています。この時、エルサレムには敬虔なユダヤ人たちが天下のあらゆる国から来て住んでいま

した。当時、世界の色々な地域に離散していたユダヤ人は各地に共同体を作って生活していましたが、信仰に厚い人たちは三大祭りを守ってエルサレムに巡礼したわけです。ですからこの時もたくさんのユダヤ人が世界各地から集まっていました。彼らはユダヤ人としてヘブル語またアラム語を知っていたでしょうし、当時の世界の共通語ギリシャ語を使うこともできたでしょう。そういった言葉で、目の前の人たちが何かを語っているなら分かります。ところがその人たちは、自分たちしか知らないはずの遠い国の言葉をしゃべっています。エルサレムでこんな言葉を聞くと、信じられません。その様々な国のリストが9節からあげられています。

まず最初のパルテヤ人、メジヤ人、エラム人、またメソポタミヤの人たちは、ユダヤの東方に住んでいた人たちです。かつてバビロン捕囚の憂き目にあった民の子孫です。彼らはペルシャ王によるユダヤ人釈放の発布にも関わらず、多くがこの地方にとどまり、増え続けたようです。次はユダヤの人々。これはおそらく広義のユダヤのことで、ユーフラテス川からエジプトの国境までを指していると思われます。三つ目のグループはカパドキヤ、ポントとアジア、フルギヤとパンフリヤ。これは小アジアの人々で、ここにもユダヤ人の共同体があったことは使徒の働き中盤のパウロの世界伝道旅行の記事に見ることができます。四つ目はエジプトとクレネに近いリビヤ地方に住む人々。これは北アフリカの人々で、中でもアレキサンドリアには多くのユダヤ人が移り住んだことが知られています。そして五番目はローマの人たち。ローマはこの使徒の働きの記録が最後に行き着く重要な地です。残りはギリシャに近い島・クレテの人たちと、もう一つはアラビヤ地方の人たち。このような当時の世界の東西南北のあらゆる地域から来ていた人たちが、自分たちが出来た国のことばをここで聞いたのです。しかもその驚きを倍増させていたのは、話していた人たちがガリラヤ人であったことです。その彼らが各国の言語を流暢に、大胆に、力強く話していた。その内容は11節にあるように、「神の大きなみわざ」でした。具体的にはイエス・キリストの地上の生涯と十字架と復活の出来事だったでしょう。人々とはにかくこの出来事に驚きあきれてしまい、みな驚き惑って、互いに「いったいこれはどうしたことか」と言い合ったのです。一方では「彼らは甘いぶどう酒によっているのだ」と言ってあざける人たちもいた、と13節にあります。色んな言葉で一斉に語り出されたのですから、その中に知っている言葉を聞き取れなかった人たちは、何をメチャクチャなことを語っているのか！と考えると、このように言ったとしても不思議ではありません。

さて、このようなペンテコステの出来事にはどんな意味、またメッセージが込められているのでしょうか。三つのことを見て行きたいと思います。まずその一つ目は、ペンテコステの聖霊は、キリストを証しさせる聖霊であるということです。私たちは最初の激しい風のような響きとか、炎のような分かれた舌という不思議なしるしに心を奪われがちですが、ここに現れた聖霊の働きの中心は、ルカが特に紙面を割いて書いていますように、弟子たちに何かを語らせたという点です。イエス様は天に昇る前に、いわゆる大宣教命令を地上の教会に与えられました。そしてそれを成し遂げるために聖霊を遣わす約束を与えてくださいました。地上に残された弟子たちを見る限り、とてもその仕事は担い切れないように思います。イエス様が一緒におられた時でさえ、ドジなことをやり、頓珍漢なことばかり言っていた弟子たちに、どうやってその続きの働きを担えるか、と思います。しかし今日の記事に示されていることは、聖霊は確かに弟子たちにそのことをなさしめてくださるということです。そして地の果てまでイエス様を証しするわざを地上の教会が最後まで成し遂げるように主導し、用いてくださるのです。

二つ目のメッセージは、「みなが聖霊に満たされ」ということです。旧約時代にももちろん聖霊の働きはありましたが、それはある特定の働き人に対して、ある特定の期間、臨むという仕方においてでした。そんな中、モーセは「主の民がみな、預言者となればよいのに。主が彼らの上にご自分の霊を与えられるとよいのに。」(民数記11章29節)と願いました。また次回、ペテロが引用するように、ヨエル書はこう述べていました。「神は言われる。終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。・・わたしのしもべにも、はしためにも、・・。すると、彼らは預言する。」と。まさにそのように聖霊がすべての信者に臨む時代が来たのです。ですから私たちはこのペンテコステを、私とは関係がない、特別な人の上だけに起こったことであると考えるのはならないのです。私たち一人一人がこの聖霊を頂く時代となったのです。

そして三つ目のメッセージは、このペンテコステの出来事には将来の素晴らしい祝福が預言的に示されているということです。もしここに集まっている人々にイエス様のことを伝えるだけだったら、120名ほどの兄弟たちはヘブル語をしゃべれば良かったのです。あるいは世界共通語のギリシャ語で話しても良かった。しかしあえてあらゆる国の言葉で神のみわざが語られたのは、将来、あらゆる国の人々が自分たちの国の言葉で神をほめたたえる日を聖霊が必ず来たらせてくださることを預言的に示すために他なりません。ヨハネの黙示録7章9～10節:「その後、私は見た。見よ。あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、だれにも数え切れぬほどの大ぜいの群衆が、白い衣を着、しゅろの枝を手にとって、御座と小羊との前に立っていた。彼らは、大声で叫んで言った。『救いは、御座にある私たちの神にあり、小羊にある。』」主の大宣教命令は、聖霊によってこのゴールに到達できるのです。そのことを聖霊はこのようにして保証し、将来のビジョンを先取りするようにして見せてくださったのです。

私たちはこのペンテコステの出来事に感謝し、聖霊の働きに信頼して歩んでいるでしょうか。前回も述べましたように、ペンテコステは歴史の中で、一度限り起こった出来事です。ですから私たちはこれと同じ出来事が再び起こることを求めるべきではありません。むしろ私たちはこの日に起こったペンテコステの祝福の中にすでに生かされています。天に昇られた主が聖霊を遣わしてくださることによって、聖霊が常に私たちと共にあるという聖霊の時代がついに始まったのです。イエス様がそのまま地上にとどまるよりも、より勝った力を持って働かれる祝福の中に私たちは生かされているのです。

私たちは自分が今、こうして教会に集い、主を信じる者となっているところに、このペンテコステの聖霊の働きを認めるべきです。この時下った聖霊が教会を導いて、地の果てまでの宣教を導いてくださったから、まさにエルサレムから見て地の果てにある私たち日本の地までも福音は宣べ伝えられて来たのです。そして聖霊が引き続き人々にイエス・キリストを語らせる働きを行なってくださっているのです。私たちは福音を聞くことができたのです。その際に私たちの心を柔らかにし、その心を照らし、この福音を受け入れることができるようにしてくださったのも聖霊です。このペンテコステなしに地上の教会の存続はあり得ませんでしたし、私たちが集っているこの杉並教会も存在し得ませんでした。私たちは今日、この礼拝の民の中に加えられているということの内に、ペンテコステ以来の教会にとどまり続けて、主の大宣教命令を導き続けてくださっている聖霊の働きを認めて賛美すべきです。

そしてこの聖霊を頂いている私たちも、この宣教命令を導かれる聖霊に信頼して、自らをささげたいと思います。イエス・キリストは宣教の主であり、その働きを進めるために聖霊を遣わされました。この聖霊を内に頂きながら、宣教への心を持たない人は、イエス・キリストの

心を持っていない人と言わなければなりません。もちろん私たちはそれぞれ召しや賜物、立場が違います。しかし今日の箇所を示されているのは「みな聖霊に満たされ」ということです。一人一人もれなく、この聖霊を頂いています。私たちはこの聖霊に導かれて、それぞれが遣わされている場で神の国の拡がりのために仕えることができるのですし、またそのように主に命じられています。

必要なことは、天上の主がこの日に遣わして下さった聖霊の力に私たちが改めてより頼むことでしょう。使徒の働きが述べていることは、この聖霊によって私たちは主に与えられた大命令を遂行して行くことができるということです。私たちはペンテコステの恵みに感謝し、続く讃美歌のように「聖霊よ、来てください」と祈りたいと思います。そう祈るのは、まだ聖霊を頂いていないからではなく、すでに聖霊の恵みにあずかりつつも、この聖霊にこそより頼むからです。今日の箇所を示された風の勢いを持って、炎の力を持って、あらゆる働きに聖霊が臨んでくださることを求めるからです。その時に私たちはイエス様に与えられている大命令を全うして行くことができる。そしてペンテコステの日が指し示す将来の素晴らしい祝福、すなわち多くの国民が一同に会して主を賛美し、喜ぶ日が来ることのために、聖霊と共に、主と共に、父なる神と共に仕える特権と光栄に歩むことができるのです。